

ウィリアム・スメリーの遺跡と人物像

杉立義一

一、まえがき

一八世紀前半、産科学が近代化する過程において大きな足跡を残した William Smellie (以後 W・S・と略す) は、一六九七年スコットランドの片田舎ラナーク Lanark に生れ、グラスゴーで医学を学んだのち郷里に帰り、実地医家として二〇年を送った。四二歳の時ロンドンに移り産科臨床医兼助産学教師として二〇年間、遂に "The Master of British Midwifery" といわれるまでになった。六二歳の時、病を得て郷里に隠退し四年後の一七六三年に死亡した。

一八世紀のヨーロッパでも日本でも、助産学は中世的な旧態から脱皮して近代的管理へと成長していった。分娩機転の解明と産科器械の応用は、分娩に関する主導権を産婆 (midwife) から男性である産科医へと変えていった。筆者は賀川玄悦 (一七〇〇~一七七七) の業績研究の過程において、W・S・と玄悦との間に相似性を見出して、W・S・の人物像に強い関心を抱くようになった。たまたま一九八四年四月三〇日・五月一日にラナークを訪れることができた。勿論短時日の走馬看花的な探訪であり、かつ研究不足ではあるが、W・S・の今に残る遺跡と資料について報告するとともに若干の考察を加える。

二、ウィリアム・スメリーの略年記

“WILLIAM SMELLIE”の著者 R.W. Johnstone は、W・S・の六〇年にわたる生涯を二〇年毎にアーチを画く三つの橋にたとえている。

第一の橋 学校と医学見習生の時期

一六九七、ラナークで出生、月日は不詳、父は Archibald Smellie、母は Sara Kennedy。

グラマスクールを卒業後、ラナークの開業医に薬剤師見習として勤務。

グラスゴーに行き、Dr. John Gordon に年季奉公して医学を学ぶ。

第二の橋 田舎で開業しながら将来への準備と自己教育の時期

一七二〇、ラナークに帰り村医 Village Doctor として開業。その場所は後年彼の名をとって Snylum といわれる。

一七二三、Euphan Borland と隣町ハミルトンの教会で結婚。

一七三三、Faculty of Physicians and Surgeons of Glasgow のメンバーとなる。

この間、自分の産科知識の不足を痛感し、たまたまフランス製産科鉗子の図を雑誌で見たことも誘因となって、ロンドンに移住する。

第三の橋 ロンドンにおいて助産術の教師として、偉大さと名声を得た時期。

一七三九、ラナークを後にしてロンドンに移る。しかし W・S・の意欲を満たす何物も見出せないで、パリールに行き Gregoire に師事して骨盤ファントームについて学んだ後、ロンドンに帰る。一七四一年までは Pall Mall に住んだが、

その後 Gerrard St. Wardour St. に移る。スコットランド出身の武骨者とか男産婆 Man-Midwife といわれて対抗者も多かったが、一〇年間に二八〇回以上講習会を持ち、九〇〇人以上が受講し、一一〇〇人以上の貧しい婦人達の分娩を経

験する。

一七四五、ロンドンの三人の医師の証明と彼のよく知られた活動によって、グラスゴー大学より学位 *Doctorate of Medicine* を受ける。

一七五一、*Treatise Vol. 1.* を刊行。

一七五四、*Anat. Tables* 及び *Treatise Vol. 2.* を刊行。

一七五九夏、ロンドンでの激しい不撓の生活の結果、年齢による手指の感覚の鈍麻を感じるようになる。そこで隠退を決意し後の仕事を妻の姪の夫 *John Harvie* に譲り、ラナークに帰り *Smythun* に小さな家を建てて住む。

一七六三、三月五日、喘息と昏睡により死亡し、*St. Kenigern* の墓地に葬る。

一七六四、*Treatise Vol. 3.* 刊行。

一七六九、六月二十七日、妻 *Euphan Borland* 死亡。

三、ウィリアム・スメリーの遺跡

W・S・の郷里ラナークはグラスゴアの南東二四マイル、エジンバラの南西三三マイルに位置する。一七世紀の末期、スコットランドは貧しく穀物は実らず、多くの人々が飢餓のために死亡するという年がつづいた。W・S・が学童の頃、イングランドとスコットランドの同盟が結ばれた。ラナークは、その当時人口二〇〇〇人の小さな町であったが、歴史的には一〇世紀まで遡る古い町であった。羊毛貿易の中心であり、ラナークシャーの州都として重要な地位を占めていた。

(1)ウィリアム・スメリー記念病院 *WILLIAM SMELLIE MEMORIAL HOSPITAL.*

グラスゴーより国道を南下し途中より左方(東方)にわかれて進む。三〇分余走ると前方の丘陵にラナークの町が見えてきた。町に入る手前の左手に、W・S・の記念病院があった。院長の *Dr. William T. Hannay* に迎えられた。



図 1 ウィリアム・スメリー記念病院

院長室の壁面には W・S・夫妻の写真・両親の写真及び門人の William Hunter らの写真がかけてあった。その著書 *Anat. Tables* の初版本がガラスケースの中に開いて展示してあった。この病院は年間千五百余件の分娩を扱うラナーク地区の中心的産科病院である。

本館の前庭にブロンズの母子像が建ててあり、その前に W・S・のメモリアルストーンが置かれていた。その碑文は、

IN HONoured MEMORY OF WILLIAM SMELLIE A
GRADUATE OF THE UNIVERSITY OF GLASGOW WHO
REVOLUTIONIZED THE PRACTICE OF OBSTETRICS
HE WAS BORN AT LANARK IN THE YEAR 1697. AND
DIED THERE IN THE YEAR 1763.

(2) ウィリアム・スメリーの墓 St. Kentigern 墓地。

記念病院より車で数分、町の中のやや上り道を進み、登りきった広い場所に St. Kentigern の墓地があった。ここは一二世紀に建てられた St. Kentigern 教会の跡で、今はその柱と基礎の壁だけが残っていた。その広い墓地には黒ずんだ墓石が多数立ててあり、墓地の中央にある教会の遺跡の壁に接して、写真のような立派な霊室があった。これが W・S・の墓であり、墓守に頼んで扉を開けてもらい中に入った。

二坪位の広さである。奥の立石は W・S・の両親の墓石であり、その前に置かれた扁平な石が W・S・夫妻の墓石であった。その碑文を掲げる。

In Hope of a Glorious Resurrection

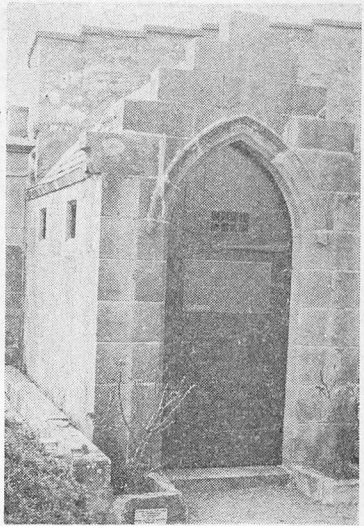


図 2 ウィリアム・スメリーの墓

aged 72.

これら W・S・S 父子の墓は決して華麗・豪華なものではない。むしろ単純且つ簡潔ではあるが、甚だ嚴肅なものである。然しながらスメリー家の墓は、この墓地では格段に立派である。これは一九三一年にエジンバラとグラスゴウの産科学会によって改修されて、現在みるような姿になった。

W・S・S の父 Archibald Smellie は当時の記録によれば、教会会議に出席しまた長老に指名されていることからみても、ラナークの人望家であったことがわかる。母の Sara Kennedy は隣接地の小地主階級の出身である。この両親のもとでキリスト教的道徳を身につけて、快適で善良な雰囲気の中で成長した。

(3) ウィリアム・スメリーの蔵書 Lindsay Institute

墓地の前には大きな家畜市場があり、その横を通って坂を二、三百メートル下った所に Lindsay Institute があった。町の小さな図書館兼公民館といった感じの建物である。その一階の一隅に写真のような書棚が一台あり、草表紙で同じよ

Here lies Sara Kennedy spouse to Archibald
Smellie in Lanark who came into this life
April 6 1657 and departed April 20 1727.
Also the said Archibald Smellie lies here who
died June 25, 1735 Aged 71.
This is Doctor William Smellie's Burial-Place,
who died March 5 th 1763, aged 66.
Here lies Euphan Borland, spouse to the said
Doctor Smellie who died June 27 th 1769,

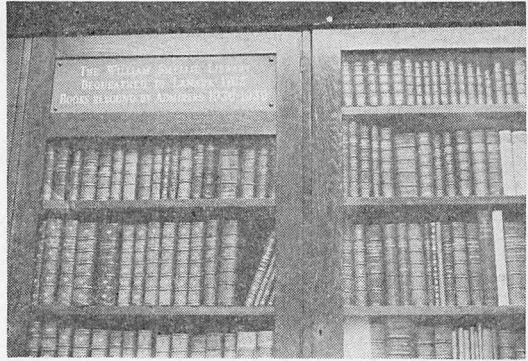


図 3 ウィリアム・スメリーの蔵書

うに装訂された書物約三百冊がならんでいた。

これらはすべて W・S・の蔵書であり、医学関係の他に歴史・文学・美術等の書籍もあり、また彼の原稿類も含まれていた。これらは W・S・の死後、その遺言によってラナークの公立学校に保存されていた。一時期グラスゴー大学図書館またはエジンバラ国立図書館に移す話もち上がった。しかし W・S・の遺志を尊重してラナークに残すことに決まり、一九三四年 Lindsay Institute に移され、一九三六―三九の間に、Admirals によって書籍の改装が行われた。彼の使用した椅子二脚も同時に保管されていた。

(4) Smyllum (Smelom)

ラナークの町はずれで、W・S・が一七二〇年から一七三〇年まで実地医家として開業していた場所で、後年彼の名をとって Smyllum または Smelom と呼ばれた。一七五九年隠退してロンドンから帰り、この地に小さな家を建てて住んだ。スメリーの死後、その家と土地は妻の姪の Anne Hamilton に与えられた。

ラナークの古地図をみると St. Kenigern 墓地の東北すぐ近くである。

四、ウィリアム・スメリーの著書・肖像・器具等

W・S・の著書として次の二種の大著がある。

A Treatise on the Theory and Practice of Midwifery (以後 Treatise と略す)

A Set of Anatomical Tables with Explanations, and an Abridgment of the Practice of Midwifery, with a view to

illustrate a Treatise on that subject and collection of Cases. (以後 Anat. Tables と略す)

Treatise の第一巻は一七五一年二月にロンドンで出版された。この時まで W・S・は既にロンドンで十年間にわたる実地と教育の経験をつんでおり、その成果を門弟達に伝えたいという彼の強い願望をみる事ができる。第二巻(副題・A Collection of cases and observations in midwifery)は一七五四年に出版された。第三巻(副題・A Collection of preternatural cases and observations in midwifery)は、W・S・の死後、一七六四年に出版された。

Anat. Tables は Treatise の実例図表として一七五四年にロンドンで出版された Folio 版である。この書は英国でも再度版を重ねたばかりでなく、独・仏・蘭・米の各国語に翻訳されて一八世紀後半の産科学教本となった。

Anat. Tables はわが国にも舶載されて、大通詞植林重右衛門が明和七年(一七七〇)に江戸にもたらし、これを見た杉田玄白は『解体新書』の中で賀川玄悦の上臀下首説を肯定する資料としてこの書にふれている。更に片倉鶴陵は『産科発蒙』の中で Anat. Tables の第一六・一七の二図を木版でのせ、産科鉗子を死中求活の一奇器也とのべている。また『解剖存真図』にも Anat. Tables の第六図をのせている。

(1) Rynsdyk が画じた Anat. Tables の挿図の原画 Dr. William Hunter's Museum. グラスゴー大学内。

William Hunter (一七一八—一七八三) は弟の John Hunter とともに、ハンター兄弟として有名である。W・ハンターは一七四一年、ハミルトンを去ってロンドンに移り、W・S・と生活を共にしながら産科を学んだ。W・S・が貧困階層を対象としたのに対し、W・ハンターは上層階層の婦人を患者とした。彼は助産学ばかりでなく解剖学の教師でもあった。一七七四年に The Anatomy of the Human Gravid Uterus を刊行した。

Anat. Tables の挿図の原画のうち、Rynsdyk の画じた二五の原画は、John Harvie の死後、一七七〇年のオークションで W・ハンターが買いとり、ハンターの死後、彼の他のコレクションと共にグラスゴー大学に残された。

(2) ウィリアム・スメリーの自画像 Royal College of Surgeons of Edinburgh.

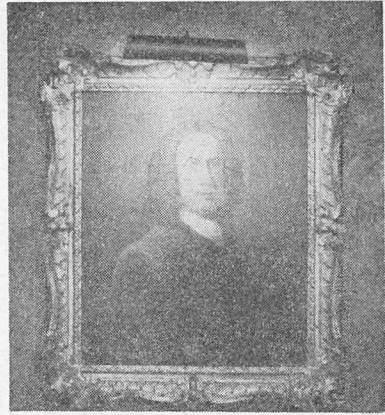


図4 ウィリアム・スメリーの自画像

W・S・がグラスゴーから帰郷して初めて開業した一七二〇年(二三歳)に画いた油彩自画像である。鬢をかぶり希望に満ちた表情が見事に画かれている。W・S・の死後、遺言によって、彼が画き且つ書齋にかけていた両親の肖像・家具・楽器等と共にラナークの公立学校に寄贈されたが、両親の肖像は早くに紛失した。

W・S・の自画像は一八二八年、John Harvie によつて、Royal College of Surgeons of Edinburgh に寄贈された。現在、同館の図書室前のロビー壁面の最も良い場所に掲げてある。大変保存が良くて今も生き生きと写している。掲載写真は筆者が特に許されて撮影したものである。この

肖像のコピーは二点あり、David Alison によつて一九三二年に作られた。一つは Royal College of Obstetricians and Gynaecologists of London にあり、他の一つは Lindsay Institute にあったが、今は見当らない。

(3) ウィリアム・スメリーの産科器械 Obsterical Museum エジンバラ大学。

(4) Camper が画じた Anat. Tables の挿図の原画。

Royal College of Physicians of Edinburgh に一一図ある。またこれと同一の原画がライデン大学にもあるが、これは Camper の自家保存用であったもの。

(5) Anat. Tables, The Wellcome Institute for the History of Medicine

Anat. Tables は一七五四年ロンドンで初版刊行以後、英・独・仏・蘭・米の各国で度々版を重ねた。この研究所の図書室には次の版が所蔵されている。(Royal College of Physician of London 内のウエルカム研究所分室所蔵のものも含む)

1st edition folio 39 plates 1754 London 3部

2nd edition folio	39 pl.	1761	London	4部
New edition folio	39 pl.	1781	London	1部
New edition	40 pl.	1785	Edinburgh	1部
New edition	40 pl.	1790	Edinburgh	1部
New edition	40 pl.	1792	Edinburgh	1部
America. Hamiltons Midwifery and Smellie's Anat. Tables.	1797.	1806	phyladelphia	各1部

ロンドンではないが、ジョン・ホプキンス大学ウェルチ図書館には初版を含め数部あり、ウィーン大学医学史研究所には、Anat. Tables の次の版がある。

2nd edition folio	39 pl.	1761	London	1部
German Latin folio	39 pl.	1758	Nürnberg	2部

なお同研究所には Treatise が四部ある。二部は London 版、一部は Paris 版であり、何れも第二版である。Treatise は欧米の有名ライブラリーの蔵書中にも、所蔵される例が少くまた古書市場にも、その名が出ることは殆どない。これは版行回数・部数ともに Anat. Tables に比して格段に少かつたためと考えられる。

次にわが国に現存する Anat. Tables の所在をみる。平戸の松浦資料博物館にある初版本は、松浦静山が一七八〇年代に入手したものである。またアムステルダム版（一七六六）も舶載されていたことは、吉田長淑の「和蘭書籍目録」からわかるが、現在その所在は不明である。この他に、わが国には Anat. Tables の初版・二版のフォリオ版が三部現存しているのを見た。

次に筆者が蒐集するごとのびきた Anat. Tables の諸版を列記する。(各一部宛)

1st edition folio	39 pl.	1754	London
-------------------	--------	------	--------

German Latin folio	39 pl.	1758	Nürnberg
Holland (Treatise と合本)	39 pl.	1765	Amsterdam
New edition	40 pl.	1787	Edinburgh
America	39 pl.	1786	Boston
America	40(41)pl.	1793	Worcester
German	40 pl.	1797	Augsburg

なお筆者は未確認ではあるが、フランス版 (1758, 1765, Paris) がある。

A Set of Anat. Tables (folio) は刊行の二年前から趣意書を発行して予約者を募り、一七五四年に初版一〇〇部が発行された。その価格は予約者には 2 guineas であった。それで銅版者への費用は充分に支払えたという。

W・S・はその序文のなかで次のように記している。挿図は Rymusdyk が二五図を画き、自分の門人でアムステルダム解剖学と植物学教授の Pieter Camper (一七二一—一七八九) が一一図を画した。図三七と三九は another hand によつて画かれたと。"JAN VAN RYMSDYK" の著者 J.L. Thornton は、another hand とはメモリー自身のことであると述べている。また図三八は筆者不明であるが、画三七・三八・三九は一連の産科器具の図であることから、同一の芸術家 (W・S・の) によつたものだろうと述べている。

New edition (一七八五) 以後は、図表が四〇図となつている。なかには第四〇図が二図にわかれていた版もある。

初版のみ A Set of Anat. Tables. となつているが、これは Set の古体字ではなくてミスプリントである。巻末に Errata とつづいてゐる。

筆者は Anat. Tables がわが国に舶載された正確な時期を知りたいと思ひ、一九八三年四月二十八日、ハーグにあるオランダ国立公文書館におつて Dr. M.E.V. Opstall とともに一七七〇年前後の長崎の蘭館から本国への報告文書を克明

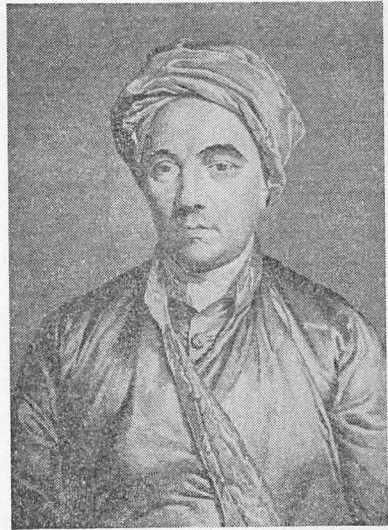


図 5 ウィリアム・スメリーの肖像
銅版画

に調査したが、Anat. Tables の書名を見ることはできなかつた。これは公的な輸入品ではないからだろうと Dr. Opstall は述べていた。

(6) ウィリアム・スメリーの肖像銅版画 Royal College of Physicians of London 内のウエルカム研究所の分室。

ここに W・S の五六歳の肖像画の銅版画が所蔵されている。この原画は Rymstadk が一七五三年に画いたもの(原画は所在不明)を、銅版作家で Anat. Tables 等の銅版画を作った Charles Grignon が銅版画に仕上げたものである。同

じものがエジンバラ大学にも一部あるといわれる。二三歳の時の自画像と異り、三〇数年のロンドンでの精力的な活動の為に、すっかり体力・氣力を消耗しつくした状態がよくあらわれている。

(7) ウィリアム・スメリー型産科鉗子 The Wellcome Museum of the History of Medicine.

この博物館はロンドンの Science Museum の四・五階の全フロアを占めている。古今東西の数ある医療器具の中にもスメリー型産科鉗子が展示してあった。W・S も初期のうちには、紐や鉤等を使用していたが、産科鉗子には特に関心をいだいた。産科鉗子は一五八八年頃、Peter Chamberlen 兄弟が発明して以来、百数十年を経ており、かつ帝王切開が一般化していなかった一八世紀初頭においては、鉗子手術は生児を得るための唯一の手術であった。しかし器具の不備・用法の未熟のため母児ともに弊害が多かった。W・S の門弟でもある W・ハンターは全生涯の経験を要約して、鉗子は利益よりも禍害をもたらしたと述べている。まして W・S 以前は産科鉗子はチェンバレン家に秘匿されて、極めて不完全で危険であった。そこで W・S はこれを改良して、母児を損傷しないものにしようと種々の工夫を重ねた。まず小さく

軽量にした。次に前後の彎曲を作って骨盤腔に合致するようにした。また金属による軟部組織の損傷を少くするため、木製の鉗子を作ったり、金属の外側をレザーで巻いた。今も被覆されたレザーが僅に残っている鉗子を、この博物館で見ることが出来た。

五、ウィリアム・スメリーの受けた教育

W・S・のうけた職業教育について考えてみるに、これについては不明な部分が多いと伝記作家は書いている。

彼はラナークのグラマスクールでラテン語・フランス語も学んだ。また美術にも長じていたといわれる。卒業後ラナークの開業医 William Inglis または Walter Carmichael のどちらかに薬剤師の見習生として徒弟入門した。何年かの後にグラスゴーに行き、外科医 Dr. John Gordon に徒弟奉公して (apprentice) 医学を学んだ。Gordon は後に学位を得て内科外科医会会長になった。

W・S・が帰郷して開業した時には、学位は勿論何のライセンスも持っていなかった。その当時、スコットランドにおいては実地開業医家には、それらは必要なかった。スコットランドの四つの医学校 (Aberdeen, Glasgow, Edinburgh, St. Andrews) は、何れも一八世紀の初めにスタートした。例えばエジンバラ大学も一五八三年に創立されたが、医学部は一七二六年になって漸く発足し、その三年後に小病院が開設された。初期は化学・植物学・解剖学・生理学は教育していたが、医学の組織的な教育はなかった。従って当時は医学を学ぶためには、特別に恵まれた人はライデンかパリに留学したが、その経費は非常に高額であった。そのため大学で教育を受けた医師の診察料・治療費は非常に高価であった。従って彼らのサービスを受けることの出来るのは、ごく限られたエリート階級だけであった。例えば一七九〇年、チューリッヒでは大学卒医師四人に対し、理髪外科医は三四人もいた。このような傾向はヨーロッパでも大都会を除くと、一九世紀までつづいた。これをみてもわかる通り、医師を志す一般の人はW・S・が歩んだのと同じ様に、著名医家に徒弟奉公し

て医学を修業するのが普通であった。

六、ウィリアム・スメリーの人物像

ラナークでの Village Doctor としての生活はどうであったか。一八五八年エジンバラにおける英国医師会の会合において、会長の Sir J. F. Simpson は次の様な演説を行った。

「ウィリアム・スメリーは村医として実地診療によると同時に、服地商人としての店を維持することによって乏しい収入の不足を補った……。しかしこれらの長いきびしい年月の間にも、彼は自己の鍛錬にきびしく、彼が借りることのできた医学書を読むことに特にいそがしかった」と。

しかし William Smellie の著者 R. W. Johnstone は、シンプソンの発言はスメリーに対して失礼であると述べている。ラナークは今ではその北部に石炭が産出されて工業も発達しているが、一八世紀前半では牧畜以外には特別の産業もなかった。今も St. Kenigern を中心とした旧市街は、閑散とした田舎町であり、周辺は殆ど牧草地である。

W・S・の村医としての生活は経済的には相当苦しかったと推測する。賀川玄悦が生計のために古鉄業を商いながら産科を実地に講究したように、W・S・も兼業として衣服商を営み家計を助けたことは事実であろうと筆者は考えている。

また W・S・が、四十歳を過ぎてから郷里を後にしてロンドンに進出した原因は何であったか。単に向学心と探求心を満すだけであつたらうか。玄悦も年、壮にして彦根から京都に移り住んだ。玄悦は庶子の身分であつたため郷里では容れられず、二度と彦根には帰らなかつた。しかし W・S・は二〇年の後、疲れ病んだ身で郷里に終焉の地を求めて帰って行った。

スコットランドの田舎出身の W・S・にとって、ロンドンでの生活は恐らく緊張の連続であつたと思う。それは彼の銅版肖像画及び早すぎた隠退を考えればよくわかる。五六歳のスメリーは単なる病身以上に精神を消耗しているように思え

る。

しかしW・S・にとっても玄悦にとっても、その業績を考えるうえで、時の運が非常に幸じたといえることができる。彼らの出生する以前、即ち十七世紀末まではヨーロッパでも日本でも、たとえ産科医といえども男性が女性の身体に直接触れることは殆ど不可能であり、難産の際に男性医師を招くと、とかくの風評をひきおこした。しかし科学の進歩は人間の思想や倫理感をも変えることを余儀なくする。そのため玄悦が行ったのと同様に、W・S・も貧しい妊婦に直接タッチして妊娠分娩経過を観察することにより、産科学の研究を重ねることができた。その結果、正常胎位・分娩機転の解明・骨盤結合線の測定・産科鉗子の改良・骨盤位娩出法（ファイト・スメリー法）等々の大きな業績を残すことが出来た。

W・S・には子供がなかったためか、財産の一部を妻の姪に残した以外は、遺品のすべてを郷里の公立学校に寄贈した。

七、むすび

ウィリアム・スメリーの郷里ラナークを探訪した機会に、見聞しえた遺跡・資料を紹介するとともに、その業績と人物像の一端にふれた次第である。

稿を終るに当り、ラナーク及びロンドン探訪に際し種々の御便宜をいただいたグラスゴーの Royal Infirmary の Dr. H.W. Gray, ラナークの WILLIAM SMELLIE MEMORIAL HOSPITAL の Dr. W.T. Hannay, ロンドン Wellcome Institute の Mr. E.J. Freeman, Science Museum の Dr. G. Skinner, 内藤記念くすり博物館館長青木允夫博士並びに論文作成に当り種々御指導と助言をいただいた石原力博士・武藤琦一郎博士・酒井シヅ博士・蔵方宏昌博士に対し深甚の謝意を表します。

本論文の要旨は昭和五九年十一月、日本医史学会関西支部秋季大会および昭和六〇年二月、日本医史学会例会において

発表した。

文 献

- (1) William Smellie, M.D. by John Glaister, 1894, Glasgow.
- (2) William Smellie, The Master of British Midwifery, by R.W. Johnstone, 1952, London
- (3) The Chamberlens and the Midwifery Forceps, by J.H. Aveling, 1977, AMS. PRESS INC.
- (4) The Healers, A History of Medicine in Scotland, by David Hamilton, 1981, Edingburgh.
- (5) JAN VAN RYMSDYK, Medical Artist of the Eighteenth Century, by John L. Thornton, 1982, New York.
- (6) Edinburch University, by Ray Footman and Bruce Young, 1983, Edingburgh.
- (7) From Barber-Surgeon to Modern Doctor, by Erwin H. Eckertrecht, Bull. Hist. Med. 1984, 58: 545-553
- (8) The Wellcome Institute for the History of Medicine.
- (9) Dr. William Hunter's Museum, Glasgow Univ. C.H. Brock.
- (10) ANTIQUE MEDICAL INSTRUMENTS, by Elisabeth Bennion, 1979, London.
- (11) History of Obstetrics, 1983, Edited by Teizo Ogawa, Maruzen Company.
- (12) 久慈直太郎 産科手術学 昭二七 日本医書出版株式会社
- (13) 巴陵宣祐 産婦人科の歴史(西洋編) 日本産婦人科全書 第一卷 昭三一 金原出版株式会社
- (14) 阿知波五郎 ヘルマンブルーハーヴェ その生涯・思想・わが蘭学への影響 昭四四 緒方書店
- (15) 杉立義一 賀川玄悦と賀川流産科 『復刻産論』 昭五二 出版科学研究所
- (16) 宗田一 スメリーの産科書と杉田玄白 『没後二百年記念賀川玄悦』 昭五三 賀川玄悦顕彰会
- (17) 杉立義一 京都の医学史(産科篇) 昭五三 京都府医師会
- (18) 藏方宏昌 ウィリアム・スメリー著 『解剖図表』 についての検討(1)(2)(3) 『科学医学資料研究』(八三号・八五号・八九号)
- (19) 小南遊 ウィリアム・スメリーの手 『日本医事新報』三〇五八号(昭和五七年一月)
- (20) 図説産婦人科学の歴史 HAROLD SPERT 石原力翻訳 昭五七 エンタプライズKK

Relics and a brief history of William Smellie

by

Yoshikazu SUGITATSU

William Smellie was born in Lanark, Scotland in 1697 and died there in 1763. He worked as a practitioner of obstetrics and taught midwifery in London from 1739 to 1759. He became known as "The Master of British Midwifery".

"A Set of Anatomical Tables", which was written by Smellie and published in London 1754, was imported to Japan on board a Dutch ship around 1770.

That book contributed to the development of obstetrics in Japan.

I visited Scotland and London in the latter part of April and early May, 1984, during which time I was able to see various relics and historical materials relating to William Smellie.

They are as follows:

1. The William Smellie Memorial Hospital in Lanark.
2. William Smellie's grave in the graveyard of St. Kentigern's church in Lanark.
3. William Smellie library in the Lindsay Institute in Lanark.
4. Smyllum in Lanark where he died in 1763.

5. A Self-portrait at age 23. (Royal College of Surgeons of Edinburgh)
6. An Engraved portrait at age 56. (Royal College of Physicians of London)
7. "A Set of Anatomical Tables" (The Wellcome Institute in London)
8. Various obstetrical instruments which were invented by William Smellie (The Science Museum in London)